

2021年3月21日 礼拝説教要旨

詩編講解説教53「探される神」

詩編53：2～7、ルカ19：1～10

第53編は第14編とほとんど同じですが、しかし違いもあります。以前、詩編の第一巻（1～41編）では神さまの名前が「ヤハウエ」という言葉であるのに対して、第二巻（42～72編）では神さまの名前が「エロヒーム」になるという話をしました。実は第14編と第53編ではこの神さまの名前が見事に入れ替わっています。それが大きな違いです。

旧約聖書では「ヤハウエ」と「エロヒーム」二つの神さまの呼び名があります。ヤハウエは「主」と訳される言葉になりますが、特にユダヤ人が神さまを呼ぶ場合、このヤハウエという呼び名を用いました。それは例えばわたしたちが誰かを呼ぶ時に「～さん」と名前を呼ぶのと同じです。固有名詞なのです。それに対してエロヒームは聖書では「神」と訳しますが、これは一般名詞で、どのような神に対しても用いられる言葉です。例えば、日本語でも「神」という呼び名はキリスト教だけではなく、神道でも使われています。昔、キリスト教が日本に伝わった時に、この神道の神と区別するために「天主教」と呼びました。そのように広く一般的にも用いられるのがエロヒームという言葉。それに対してヤハウエはユダヤ人が神さまを呼ぶ時の特別な呼び名。そのように理解したらよいでしょう。そして面白いことに詩編は神さまの名を両方とも採用しています。14編では「ヤハウエ」、53編では「エロヒーム」と神さまの名前を入れ替えるだけの同じ詩編があるのです。どうしてこのようなことをするのでしょうか。

バビロニア捕囚までユダヤ人にとって神さまの名前はヤハウエだけでよかったのです。ところがバビロニアに連れて行かれたユダヤ人が直面したのはヤハウエ以外の様々な神々の存在でした。そういう中で自分たちの信じている神さまはヤハウエであることを固持する、あくまでもヤハウエにこだわる立場と、自分たちの信じている神さまは様々な神々を支配する真の神さまであるから、むしろ神の中の神としてエロヒームと呼ぶべきであるというという二つの立場に分かれてしまいました。ヤハウエを主張するのはどちらかということユダヤ人内部の結束を固めていく立場であり、エロヒームは他の神々の中で真の神さまを神さまとするという立場です。しかし二つの立場は両方とも間違っていないのです。だから詩編の編集者はこの二つの立場が互いに手を握れるように、一つの詩編で神さまの名前だけ入れ替えるということをやったのです。これは知恵でなくて何でしょう。

さらにこれは単にユダヤ人の中の融和を目指しているだけのことではありません。今日は第53編ですので、エロヒームの立場で見たいのですが、ユダヤ人は捕囚後、帰還する者たちだけではなく、バビロニアに残留する者たち、各地に離散していく者たちもいました。異教の国々の中で、ともするとそういう中に埋没してしまう危険があります。けれどもどこに行っても唯一の真の神さまが、様々な神々を超えて自分たちを見守ってくださる。そういう信仰に離散した人々は支えられたのではないのでしょうか。それぞれの置かれた場所で、様々な神々の像を眺めながら、それらを支配しておられる真の神さまに心を向ける。そういう異教の地にあるからこそ、彼らはエロヒームという名前を特別な思いで呼んだのです。それはこの日本という異教の地に住むわたしたちにとっても通じることではないのでしょうか。八百万の神々が溢れるこの土地で「神」という呼び名がいたるところで聞かれる中で、天地万物を造られた真の神さまを見上げる。わたしたちはそういう信仰の戦いをしています。

そのようなことを念頭に改めて2～4節に注目します。「神を知らぬ者は心に言う。『神などない』と。人々は腐敗している。忌むべき行いをする。善を行う者はいない。神は天から人の子らを見渡し、探される。目覚めた人、神を求める人はいないか、と。だれもかれも背き去った。皆ともに汚れている。善を行う者はいない。ひとりもいない」(2～4節) 異教の土地でその中に埋もれていく人々。しまいには神さまを見失い「神などない」と言ってしまう。これは単に異教の神々を拝む人たちのことだけではありません。真の神さまを信じていたのに、異教の神々に流され背いて行った人たちも含まれています。その彼らを神さまは天から探されるのです。「目覚めた人、神を求める人はいないか」と。目を覚まして、もう一度神さまに立ち返ることを切に求めておられるのです。また彼らが知らずに「神」と呼んでいるものをその背後でご支配しておられる真の神さまを見出すことができるように求めているのです。

そして神さまは、ただ天から眺めて探されるだけではありません。とうとう天からこの地上に降られて探しに来られた。それがイエス・キリストです。今日はザアカイのところを読みました。「人の子は、失われたものを捜して救うために来たのである」(ルカ19:10) 罪ゆえに御前から失われ、いなくなっていたわたしたちを主はどこまでも探してください。それは十字架の死に至るまで徹底されました。陰府にまで降られ、そこに捕らわれていた者たちを探され救い出されるのです。

わたしたちは自分の強い信仰によって御前に踏みとどまっているわけではありません。むしろ神さまから探され、見出されて、今ここにあるのです。それゆえにここに救いの約束があります。「神が御自分の民、捕らわれ人を連れ帰られるとき、ヤコブは喜び踊り、イスラエルは喜び祝うであろう」(7節) わたしたちもキリストによって探され、見出され、神の子として御前に回復されたことを喜びここに礼拝を献げるのです。